シシポジューム

九州における間伐の諸問題

司会　九州大学農学部　宮　島　　寛

司会者　従来，九州における人工造林は，一般に疎植で，スギではさし木品種を用いた場合が多く，植栽後の下刈り，つる切りおよび除伐を含めた最初の枝打など，いわゆる林分閉鎖初期までの保育作業は一応集約的に実施されてきたが，成林後の森林の保護や林木の形質生長いわゆる品質管理を考慮した枝打や間伐は必ずしも十分であったとはいえない。しかも一般に短伐期施業で，材積生長の増大を主目標とするものが多かった。

今日，森林の造成が木材生産という経済機能の対象としてのみでなく，森林環境の保全や保健休養の場としての公益機能の発揮という面で重要な意義をもつことが再認識され，林業生産はこの両機能の調和のうえに成り立つべきであるということが要請されるようになった。一方，現在では林業生産のための労働力の確保がきわめて困難な情勢にあり，従来の短伐期による一斉皆伐と更新の繰返しは，林地の生産力のみならず労働生産性のうえからも反省すべき時期にあるといえる。したがって，今後の森林造成は必然的に高伐期を指向すべきで，このような立場から，森林の保育と効率的な投下資本の回収をはかるためには〝間伐〟の実行が，その一つの方法として考慮されなければならない。

間伐とは〝下刈りやつる切り，除伐などの時期を経て，目的樹種を主体として成林した林分において，主伐までの期間にその一部を伐採し，林分密度や林木構成を調節し，残存木の生長を生産目標に適うように導くための保育作業の一つである〟と定義される。

そこで，間伐の実施に当っては，植栽から主伐に至るまでの木材生産の全系列のなかで，林分密度管理の問題として捉える一方，この間伐木は収穫の対象（収入間伐：利用間伐）となることを前提とする。しかもその間伐材は材質の面でも価格の面でも不当に低下することなく，また，残存林分については，その保育を十分考慮するなど，間伐実行上の諸問題に関して，その解決策が確立されなければならない。

ここでは，以上に述べたような問題点を討議すべき話題として，つぎの３項目に分けてそれぞれ報告していただくこととした。

まず，初めに「森林の保育や保護的立場からのアプローチ」について林業試験場九州支場の尾方技官に，ついで，「林業の経営目標の立場からのアプローチ」として宮崎大学の三善教授に，最後に「間伐実行上の立場からのアプローチ」として九州大学の青木助教授にそれぞれお願いしたい。

会の運び方については，最初に３講師からそれぞれご報告をいただき，ついで，各講師の報告内容について，それぞれ１名ずつコメントをお願いし，各コメンターに対するリポーターからの回答をお願いすることにした。そして，さらに，時間があれば，一般出席者による共通討議という形ですすめたい。

それでは，まず，尾方講師からお願いしたい。